

# 視察報告

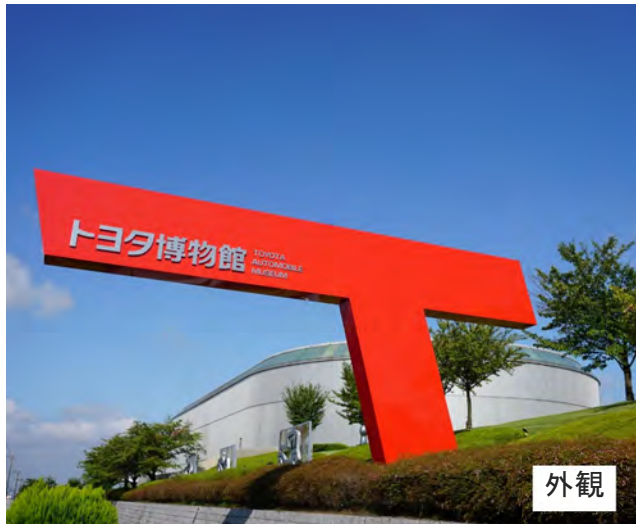
# 視察実績

実施日		視察先	出席委員
第1回	令和4年 8月8日	トヨタ博物館（3頁）	田中座長、川口委員
		愛知県立公文書館（23頁）	
第2回	令和4年 8月17日	徳島県立博物館（18頁）	田中座長、川口委員、川島委員
		徳島県立文書館（25頁）	
第3回	令和4年 10月7日	印刷博物館（8頁）	田中座長、川口委員、川島委員
		アドミュージアム東京（13頁）	井上委員、川口委員

# トヨタ博物館

①基本情報

- トヨタ自動車株式会社の創立50周年（昭和62年）記念事業の一環として、1989年（平成元年）にオープン。
- **クルマ文化の歴史**を紹介する博物館  
「クルマ館」
  - ：19世紀末のガソリン自動車誕生から現代までの自動車の歴史を日米欧の代表的な車両約140台を展示。  
移動の自由を象徴する「乗用車」を軸に体系的に展示を構成。ほとんど全ての車両は走行可能な「動態保存」とする。
- 「文化館」の「クルマ文化資料室」
  - ：「**移動は文化**」をテーマに、ポスターや自動車玩具、カーマスコットなど自動車にまつわる文化資料約4000点を展示。  
約800点のミニチュアカーを時間軸として、人々が織りなした多様なクルマ文化に浸ることができる。
- トヨタ自動車株式会社 社会貢献推進部（企業・車文化室）の管轄。
- レストラン、ブックカフェ、ミュージアムショップ併設。
- **他社や国外自動車メーカーからも協力を得て展示。**
- ベビーカー、車椅子の無料貸し出しのほか、授乳室、障害者用駐車場を整備。一部展示物は**触察に対応**。



外観



クルマ館



クルマ文化資料室

出典：トヨタ博物館HP



## ②展示 展示室：クルマ文化資料室（2019年4月リニューアルオープン） コンセプト

- クルマ文化資料室は「移動は文化」がコンセプト。模型、カーバッジ、切手、ポスター等クルマ文化に関わる資料群が特徴。
- 中央の模型展示を時間軸で展開。周囲に資料種別に実物展示。
- 常設だが「変化する展示室」とし、自分たちで差し替えや更新がしやすい仕様とする。



展示室のはじめに、コンセプトを明記



上部に国内の出来事を示し、模型とセットで歴史を追うことができる



全体を俯瞰できるようにあえて階段上のスペースをつくる。壁面で紙資料を展示。

### 展示物が魅力的に映える展示環境

- 切手、模型、錦絵、ミニチュア等資料の種別ごとに、いちばん見やすい、美しい展示方法を採用。ほぼすべて什器を新たに設計した。照度、色、高さ、配置も種別でベストな状態にする。展示点数の計画がたってから、什器の設計がスタートした。
- 展示室の色調は、赤をアクセントとして紺色がベースだが、展示物の種別や調光で色合いを変化させている。



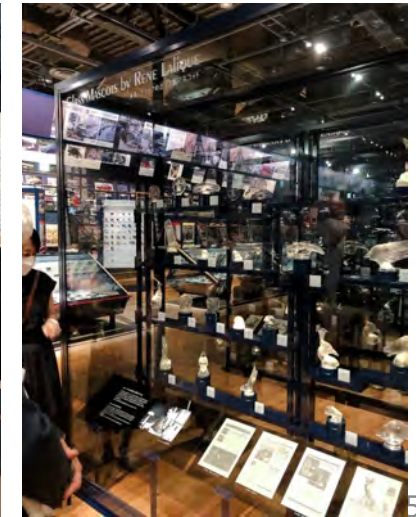
実物資料を引き出しの中にも収蔵。閲覧できる



大量の紙資料を見せる展示



展示替えを想定した壁面（格子状）



演示具や配置にも配慮



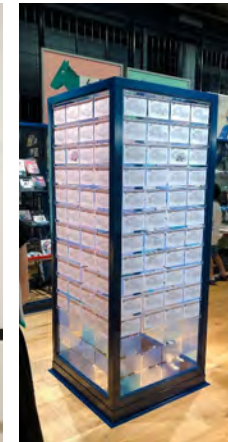
## ②展示 展示室：クルマ文化資料室（2019年4月リニューアルオープン）

## 誰もが親しみやすい工夫（参加性）

- クルマに関心がない層や子どもにも興味をもってもらえるよう、さわれる展示をプロローグに配置。
- 最後にクルマの思い出を綴ってもらう。漫画や音楽など身近なところからも来館者同士の対話を促す。
- あえてデジタルをつかわず、手書きなどアナログで懐かしさを演出。



展示室に入る前のプロローグ展示。室内の展示物をダイジェストで紹介。本来は、ミニチュアなどさわってみることもできる



手書きで来館者がメッセージを残す



漫画や音楽など思い出からクルマを語る

## ②展示 展示室：クルマづくり日本史（2022年4月リニューアルオープン）

## デジタルの強みを活かした展示手法

- 本展示室は、日本の自動車産業の歴史がテーマ。実物資料をいっさい置かず、映像やグラフィックのみで語る。
- 中央の「動く年表・歴史ロード」が象徴的。日本車に関わる出来事を時代を追って写真とともに展開し印象付ける。
- 壁面では出来事の詳細を解説。「物語」「人物」「系譜」「数字」という切り口。
- タッチパネル式の検索型展示とすることで、情報の深度をコントロールし個人の興味によって掘り下げてもらっている。



動く年表歴史ロード



検索型展示

## ②展示 展示室：クルマづくり日本史（2022年4月リニューアルオープン）

- 日本の全メーカーの変遷を一望できる系譜や自動車普及率の数字などをビジュアルでグラフィカルに示すことで、規模感や変化、関係性など情報が具体的にイメージしやすくしている。
- 壁面を大きく使うことで、大人数に向けたアテンド解説もしやすい。
- 全体を通じて他社や国立科学博物館、専門家の監修を得て情報整理。



## ②展示 閉架閲覧室

- 通常は一般公開していない閉架閲覧室は、専門家やメディア関係がリサーチ目的で使用。学芸員の付き添い込みで利用可能。
- 収蔵庫との違いとして、あえて展示ケースをおき、貴重資料を展示。学芸員が案内することもある。
- 当初、温湿度管理が行き届いた展示室として実験的に運用。資料展示室の設計にデータを活かした。





# 印刷博物館



## ①基本情報

- 開館以来、印刷が人々の生活に果たした役割を、展示や研究活動等を通じて広く公開。印刷の技術的な側面ばかりではなく、印刷とは何かという本質的な問い-**印刷の社会性やその歴史がもつ文化的側面**-を追求。当館の使命とする。
- 企業ミュージアム（凸版印刷株式会社が運営／広報本部に所属）であるが、社史ではなく印刷の歴史や文化を伝える。印刷と人間の関係を、文明史的なスケールの視点から捉え直し、これに携わった人類や社会の営みについて検証を加える「**印刷文化学**」を構築することを開館前からのミッションとする。開館20周年となる2020年に、これまでの成果を具現化する常設展のリニューアルを実施。2020年10月リニューアルオープン。
- コレクションの総点数は約7万点（日本の書物、西洋の書物、版画とポスター、印刷道具と機械等）、印刷関連書籍を約7万点有する。**活版印刷技術の保存と伝承、研究活動を行う設備「印刷工房」**で活版印刷の普及に取り組む。
- 印刷工房での活版印刷体験が人気。ライブラリー（閉架式書庫/予約制）やミュージアムショップ、ギャラリーを併設。2022年**オンラインショップを開設**し、グッズや企画展の図録が売れている。SNSでも日々情報発信をしている。



展示室へ続くプロローグ



展示

出典：印刷博物館HP

## ②展示

## リニューアルの全体方針

開館20周年を機に展示室を中心に大幅なリニューアルを実施。全体方針を、これまでの活動の蓄積を基盤に日本の印刷文化史の拡大展開を図ると同時に、世界とのつながりを総合的に学べる世界印刷文化アーカイブを構築することとし、

- ①日本の印刷文化を世界との関係のなかで、総合的に学び、理解できる
- ②歴史の時間軸で人間と印刷の関係を辿り、印刷を再発見できる
- ③歴史の中から印刷の普遍的意義と可能性がわかる と掲げる。

## 展示：プロローグ（展示室へ続く導入路）

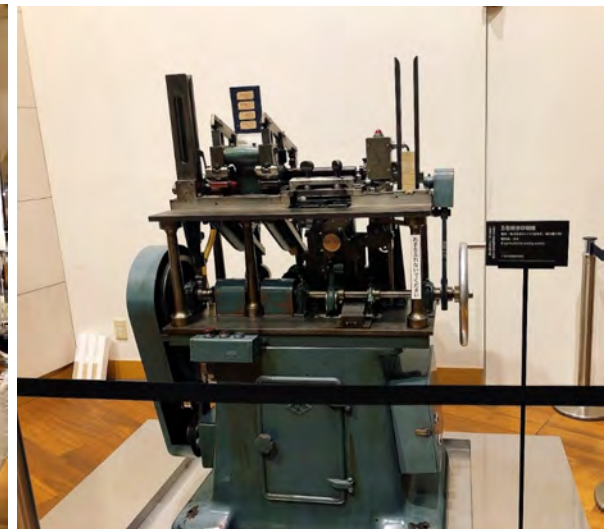
- 展示室に入る前に展示のプロローグとなる導入路を設ける。ラスコーの洞窟壁画にはじまりロゼッタストーンや嵯峨本など、古来からの印刷技術の発展の歴史を実物資料のレプリカで回廊型の壁面に展示。キャプション解説をおかず、コンセプチュアルに、ダイナミックに資料を魅せることで来館者に感覚的に印刷の歴史にふれてもらっている。団体利用者へのガイダンスの場所としても機能。
- レプリカなので実際にさわること可能。視覚障がいのある来館者にもさわって体験いただいている。
- 展示室と違い、レプリカなので温湿度管理が必要ない。展示室入口前スペースは夏休みの体験教室の会場や企画展PR等として使用。



古来からのヴィジュアル・コミュニケーションの歴史をたどる



レプリカとともにジオラマで当時に再現



硬券印刷機の動態展示 イベント時に体験できる